様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６３７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０２４５

研究課題名（和文）中世礼制史の再構築に向けた鎌倉幕府儀礼の基礎的研究

研究課題名（英文）A fundamental study of the system of the rites of Kamakura Shogunate for reconstruction of medieval Japanese history of rites

研究代表者
桃崎　有一郎（Momosaki, Yuichiro）

高千穂大学・商学部・教授

研究者番号：８０５５１１５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、鎌倉幕府の最も根幹的な儀礼である「椀飯」儀礼の基礎的研究を通じて武家儀礼研究に再考を促し、儀礼研究を自律的・独立的な学問分野＝「中世礼制史」として再構築するための方法論を確立する目的で行われた。
　まず鎌倉幕府儀礼に関わる史料を収集し、続いて「椀飯」儀礼の起源・沿革・変遷過程などの基礎的考証・検討を行い、儀礼的意義や、そこに表現された当該期の思考様式・社会構造・政治的変動などを論証・解明・展望した。

研究成果の概要（英文）：This study aims at reconstruction and foundation of the 'medieval Japanese history of rites' as an independent and autonomous field of research, by a fundamental research of "Ouban" ceremony that was the most important rite of Kamakura Shogunate.
 Firstly, I collected all the historical documents related to the rites of Kamakura Shogunate. Secondly, based on those collected documents, I researched the origin, the history and the transition of "Ouban" ceremony, explicated its significance, and surveyed the structure of the society, the politics and the thought patterns of the medieval Japan from some new points of view.

研究分野：日本中世史

キーワード：武家儀礼　鎌倉幕府儀礼　椀飯　垸飯　礼制史

１．研究開始当初の背景

中世日本史研究において、儀礼・年中行事論は、その重要性・蓄積にもかかわらず、重大な問題点が残されたまま、一種の閉塞状態に陥っている。当該分野が主に歴史学の中の他分野（政治史・社会経済史など）の研究者によって進められた結果、それら他分野の補助学問とでもいうべき位置づけに終始しているのである。儀礼・年中行事の分析は独立して行われず、ほぼ必ず他分野に回収され、政治過程や経済構造という文脈でのみ位置づけられてきた。

その結果、２つの弊害が当該分野の進展を抑圧している。第一に、儀礼・年中行事という現象の日本史・日本文化全体における意義づけが、他分野の予想・証明と整合するよう演繹的に解釈され、他分野を傍証することはあっても、他分野から自立した独自の歴史的事実の証明をほとんどなし得てこなかった点。第二に、儀礼・年中行事が実践された事実それ自体の分析・意義づけを行い日本史・日本文化全体に位置づける自立した方法論が、当該分野から内発的には蓄積・洗練・向上されてこなかった点である。

２．研究の目的

本研究は、日本中世史における儀礼・年中行事論分野が、中世社会構造の復原・解明に不可欠の研究分野である事に鑑み、当該分野を従前の政治史・社会経済史などに対する補助学問的な位置づけから、自律的な学問体系としての〝礼制史〟として確立することを目指し、序説的な基礎研究を行う。

具体的には、当該分野の中でも基幹的位置にある鎌倉幕府の儀礼・年中行事論に焦点を絞り、個別的儀礼のうち主要なもの（垸飯・流鏑馬など）を取り上げ、従来は他分野の予想・証明を借りて推測されるに過ぎなかった具体的実態（起源・沿革・形態・変遷・目的など）を、科学的批判と今日の歴史学の達成水準に耐え得る水準で再検討し解明する。

３．研究の方法

本研究では、鎌倉幕府に関係する既知の記録・文書から網羅的に、また未知・未紹介の記録・文書の採訪・調査・紹介を通じて追加的に、幕府儀礼に関わる史料を収集し、データベース化する。収集は、索引・電子的キーワード検索では不十分であるため、逐一全文に目を通し、幕府儀礼関連史料であるか否かを判別・検討しつつ行う。

次に、抽出された史料群をもとに、個別儀礼ごと（垸飯・流鏑馬の順）に起源・沿革・変遷過程などの基礎的考証・検討を行い、儀礼的意義や、そこに発露した当該期の思考様式・社会構造・政治的変動などを論証・解明・展望する。その際、他分野の最新成果との対応関係に注意するとともに、それらに対する疑問・新案提示や礼制史ならではの問題提起・仮説提示を主体的・積極的に行う。

４．研究成果

本研究では、下記に大別される成果を得た。

(1)中世武家儀礼に関わる基礎史料について、継続的な調査を行って一定の成果を得、雑誌論文の形で成果を発表し、学界・国民と共有した（別掲〔雑誌論文②・③・④・⑦〕）。全て学界未知の史料であり、その紹介（活字化）が果たされた意義は、日本中世史研究において大きい。このような基礎的作業（調査・紹介）が待たれる史料は未だ膨大に存在すると予想され、日本中世礼制史のみならず日本史・日本文化研究のため、今後も継続して行う必要がある。

また別掲〔図書〕①は、難解で独特な和様漢文で記されているため読解が困難であった鎌倉幕府の政務記録『吾妻鏡』の、全編を通じた網羅的な現代語訳の取り組みの一部である。この図書の刊行により、『吾妻鏡』に散発的に出現する儀礼関係記事の精確な訳文が広く国民に共有されたことになり、当該分野や鎌倉幕府・鎌倉時代に関心を持つ国民一般のみならず、研究者も確実な解釈に基づいて礼制史以下の諸分野（政治史・法制史・社会経済史・軍事史なども含む）の研究を、従来に比して容易に進めることが可能になった。

(2) 中世武家儀礼のみならず、日本中世史・日本文化研究において重要な基礎データ集（工具書）の提供を行った。

別掲〔図書〕③・④は、平安時代末～鎌倉時代の廷臣の日記の人名索引であり、調査対象とした日記に出現する全ての人物をリストアップし、彼ら全員について実名・姓（氏・家名）・通称や略歴・属性（社会的立場・官職など）を網羅的に調査し、漢字（発音・画数）順に排列したものである。

歴史研究（日本史研究）において何よりも重要なのは、研究対象となる史料の疎漏なき全体的理解であり、そのためには登場人物の特定が不可欠となる（日本史の史料では、人物はしばしば通称で記されるため、それが何者かを知るために、まずは実名・姓を調査・推定することから始めねばならない）。

上述の２つの図書は、従来その必要性が痛感されていながら果たされなかった何種類かの中世廷臣日記の人名索引を公刊したものであり、既存の人名索引と含め、平安末～鎌倉時代の廷臣日記については、（刊行継続中のものを含めれば）ほぼ完備したことになり、その学界に対するインパクト・意義は極めて大きい。

(3)鎌倉幕府とその滅亡前後における、幕府礼制と深い関わりを持つ政治制度・過程の一

端を究明した。

別掲〔図書〕の②（共著）の分担執筆部分（「建武政権論」）は、鎌倉幕府を滅ぼした後醍醐天皇が樹立した建武政権（いわゆる建武の新政）について、その成立～滅亡に至るプロセスを、政治過程・法制度・武士の動向に主軸を置いて時系列的に論述しつつ、その内部に胚胎した室町幕府の母体（足利尊氏の弟直義が鎌倉に樹立した地方政権＝鎌倉府）において、滅んだ鎌倉幕府の儀礼（本研究課題の主たる研究対象である垸飯儀礼を含む）が復活・模倣され、幕府の再生が宣言されていたことを明らかにした。

また別掲〔雑誌論文〕⑤は、その足利直義が、上述の通り垸飯儀礼を含む鎌倉幕府儀礼体系の再生・再始動を志すにあたり、いかなる秩序・組織の樹立を構想したかを明らかにする前提として行った作業の成果である。

具体的には、直義の政治的地位は後に６０年の内乱期を経て変転しつつ、最終的に室町幕府の「管領」という地位として完成する。その「管領」という地位がいかなる地位であるかは、「管領」という言葉の本来の意味を踏まえねば解明し得ないはずだが、従来必ずしもその点は関心を持たれず、考究されてこなかった。

そこで、直義が直接前提にしたに違いない鎌倉時代に焦点を当て、鎌倉時代における「管領」という言葉の用例・変遷を網羅的に跡づけ、その核心的・本質的な語義を推定した。これにより、直義が自己の地位を何者と自覚していたかを推知する糸口が得られ、もって直義が構想した新幕府（室町幕府）において、鎌倉幕府から継承された諸儀礼の位置づけの理解に近づくことが可能となった。

(4)鎌倉幕府の個々の儀礼や、それらを総体的に包括する制度としての礼制、特に「垸飯」と呼ばれる饗応儀礼について、基礎研究（基礎的事実の発見・確定と評価）とそれに基づく展望が、格段に進展した。

別掲〔雑誌論文〕⑥は、従来は主従関係・上下関係を確認・維持・再生産する、一種の服属儀礼と目されていた「垸飯(おうばん)」という饗応儀礼が、実はそうではなく、「傍輩(ほうばい)」と呼ばれる横方向の同僚関係を確認・維持・再生産する儀礼であったことを裏づけた。そして従来、垸飯儀礼の統括者である沙汰人（さたにん）を、鎌倉幕府の執権北条氏が独占した現象について、新知見を得た。

即ち、従来は垸飯が服属儀礼と信じられていたため、上記現象は、執権として鎌倉幕府の実質的支配を進めようとする北条氏の権力伸長過程の一部として捉えられてきたが、そうではなく、実際的な専制的権力を帯びる執権北条泰時が、他の御家人の反発を買いやすいその権力を押し隠し、あたかも御家人が全員「傍輩」であるという共同幻想を全御家人に信じさせ、執権が〝支配者〟ではなく〝傍輩代表〟として幕府運営を請け負う、という形に自己の権力を仕上げるため、地味で面倒な裏方の事務局長を引き受けた現象であったという事実を解明した。

別掲〔雑誌論文〕①は、鎌倉幕府の諸儀礼が大規模に整備されてゆく鎌倉中期の一時期（将軍宗尊親王・執権時頼の時期）に着目し、それら諸儀礼が整備されてゆく過程を跡づけるとともに、従来必ずしも礼制史的に十分に掘り下げられていなかったその意義を解明した論文で、本稿で解明した事実は概ね以下の通りである。

具体的には、摂家将軍期の度重なる政争で、中期鎌倉幕府では御家人の大規模な減少（没落や戦死）や経済的打撃が繰り返された。その結果、多大な出費を強いられる幕府儀礼を担う経済的体力が御家人から失われ、５代将軍藤原頼嗣の末期には、鎌倉幕府儀礼体系は崩壊の危機に瀕していた。しかも政変で追放された頼嗣に代わり、６代将軍として宗尊親王を執権時頼が擁立したため、将軍の親王という格式に伴って幕府儀礼に要する出費が激増し、ますます負担能力のない御家人が幕府儀礼から遠ざかった。

執権時頼はその状況を打開すべく幕府制度の整備と御家人の儀礼動員に本腰を入れた。その様子から見出されるのは、執権政治的な〝理非究明〟を重視しつつ、〝理非究明〟の場に御家人を強権的・専制的に引き出すという、理非と専制の葛藤であり、こと儀礼運営に即する限り、時頼政権はこの葛藤を解決できず、幕府儀礼における負担を御家人が忌避する問題も解決できないまま、時頼は死去した。そしてこの時頼の挫折を直接目の当たりにした後継の執権北条時宗の政権は、それまで執権政治が強権的・専制的権力の上にかぶせていた理非重視の表層をかなぐり捨て、専制的な運営へと舵を切った、と展望した。

別掲〔学会発表〕①は、その執権北条氏の専制的な幕政運営、いわゆる〝得宗専制〟が本格化した時期における、幕府儀礼の運営の実体とその意義について、網羅的に調査し、展望を述べたものである。

具体的には、従来、得宗（北条氏嫡流の家督）が将軍と同様の儀礼を行いはじめた減少が、得宗による将軍権力の簒奪傾向を示すものと評価されてきた。しかし、上述の時頼期の趨勢を踏まえ、関係史料を再検討した結果、得宗による将軍儀礼の模倣は、従来将軍が単独で担ってきた（将軍しか行えない儀礼）を得宗が分担し、負荷を分散して将軍・幕府の負担を軽減する目的・意義を有した可能性が高いことが、明らかになった（幕府の費用で将軍が行った儀礼を、得宗が自腹で行ったのであるから、幕府財政に対する貢献でもある）。

別掲〔図書〕⑤は、如上の具体的な学術的成果を総合して、一般向けに、鎌倉幕府の儀礼と年中行事について、概説的に論じたものである。これにより、本研究課題で進展した

研究成果を国民に広く換言する責を、一定度果たした。内容は一般向けの概説ではあるが、本研究課題の成果を最大限に踏まえて最新の知見を盛り込み、鎌倉幕府儀礼のイメージを全面的に刷新する、全く新しい儀礼論とて世に問うたものである。

なお、当初の研究計画では、「垸飯」に関する基礎研究を一通り終えた後、同じく鎌倉幕府儀礼でありながら武芸を主とする点で異色というべき「流鏑馬」の研究へと進む予定であったが、「垸飯」の理解に必要な研究トピックが、数の面でも、関わりを持つ分野への広がりの面でも、当初の予想を超えて拡大したため、本研究の期間中は「垸飯」の研究に終始し、「流鏑馬」の研究に本格的には着手できなかった。

ただ、「流鏑馬」に関する基礎史料の収集は一定度終えてあり、収集作業の完成と整理・読解・考察を主目的とする別の科学研究費補助金の補助事業（「流鏑馬の起源・成立過程の実証的再検討–鎌倉幕府儀礼の源流と東アジア文化–」、研究期間：2016 年 4 月 1 日～2020 年 3 月 31 日、研究種目：若手研究(B)、研究課題/領域番号：16K16911）が既に採択済みであるため、その研究計画に沿って、本研究の成果を十全に踏まえつつ、更に研究を進める予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①桃崎有一郎、北条時頼政権における鎌倉幕府年中行事の再建と挫折―理非と専制の礼制史的葛藤―、鎌倉遺文研究、査読有、37 号、2016、pp.1-29

②遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎、綱光公記―文安五年記・文安六年正月～三月記・文安五年符案―、東京大学史料編纂所研究紀要、査読無、26 号、2016、pp184-92

③遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎、綱光公記―応仁元年暦記・応仁元年四月別記―、東京大学史料編纂所研究紀要、査読無、25 号、2015、pp.82-93

④遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎、綱光公記―寛正五年暦記（二）―、東京大学史料編纂所研究紀要、査読無、24 号、2014、pp.78-88

⑤桃崎有一郎、中世前期の「管領」―鎌倉・室町幕府「管領」研究のための予備的考察―、年報三田中世史研究、査読無、20 号、2013、pp.23-52

⑥桃崎有一郎、鎌倉幕府垸飯儀礼の変容と執権政治―北条泰時の自己規定と傍輩・宿老・御家人―、日本史研究、査読有、613 号、2013、pp.18-46

⑦桃崎有一郎、『鎌倉遺文』未収成田(水谷)家文書の翻刻と基礎的考察、 鎌倉遺文研究、査読有、31 号、2013、pp.123-153

〔学会発表〕（計１件）

①桃崎有一郎、北条氏権力の専制化と鎌倉幕府儀礼体系の再構築―得宗権力は将軍権力簒奪を指向したか―、学習院大学史学会 2015 年例会「歴史のなかの儀礼と権力―支配者権力の象徴機能と秩序形成」、2015.12.12、学習院大学（東京）

〔図書〕（計５件）

①桃崎有一郎ほか、吉川弘文館、現代語訳吾妻鏡 16 将軍追放、2015、pp.69-96

②桃崎有一郎ほか、岩波書店、岩波講座日本歴史 第７巻 中世２、2014、pp.41-74

③桃崎有一郎、日本史史料研究会、平戸記・妙槐記・吉続記人名索引、2014、298

④桃崎有一郎、日本史史料研究会、山槐記・三長記人名索引、2014、495

⑤桃崎有一郎ほか、吉川弘文館、現代語訳吾妻鏡別巻　鎌倉時代を探る、2016、pp.184-199

６．研究組織

(1)研究代表者

桃崎　有一郎（MOMOSAKI, Yuichiro）
高千穂大学・商学部・教授
研究者番号：80551150